

◆特集……………辞書をめぐる7つの闘い

2. 使いやすさをめぐる闘い

—英和辞典篇

投野由紀夫

英国の英英事典の編纂技術に大きな影響を及ぼすほど、世界に冠たる水準を誇っていた日本の学習英和事典。しかし、アイデアと情報量は飽和状態になるなど、大きな曲がり角にある。今、あらためて「使いやすさ」とは何かを問う。



一 はじめに

本稿では英和辞典の「使いやすさ」に関して論じてみる⁽¹⁾。まず、本稿では「使いやすさ」に対する学習英和辞典の創意工夫をいくつか紹介し、その歴史的変遷の中で「使いやすさ」とは何か⁽²⁾に関する再認識が必要なことを論じ、最後に英和辞典における「使いやすさ」を志向した場合に、どのような新しい観点が必要になってくるかを明らかにしたい。

二 英和辞典における創意工夫の歴史的変遷

日本における英和辞典の歴史を振り返ってみると、それはまさしく「使いやすさ」との闘いだったということがわかる。その歴史は欧米の外国語学習者用の英英辞典よりも長い。日本の学習英和辞典の質を飛躍的に上げたのは、ISED (*Idiomatic and Syntactic English Dictionary*) の母体を作った昭和初期の Harold E. Palmer と A. S. Hornby という二人の英語教育界の大恩人であるが⁽²⁾、それよりも以前に大正期の斎藤秀三郎の『熟語本位英和中辞典』(一九二五、日栄社)

の存在があることを忘れてはならない。

ここで詳しく歴史的な変遷を詳述することは出来ないが、例として Yamada and Komuro (1998) が挙げている日本の英和辞典の世界に先んじて導入した新機軸を二三紹介しておこう。これらはいわば逆輸入されて最近の英英辞典に盛り込まれるようになっていく。

(1) 頻度情報

現在は *LDOCE* や *COBUILD* など主要な学習英英辞典が頻度情報をつけ始めているが、日本では竹原常太の『新スタンダード英和辞典』(二六六、大修館書店) がこの先鞭をつけた。Thorndike の語彙表を活用した学習語彙リストの草分けである。現在は大半の英和辞典が記号、活字のポイント、色刷りなどで重要度に応じた表示を施している。

(2) 語法注記

日本の英和辞典は世界中に類を見ないほど、語法注記が充実している。Yamada and Komuro (1998) では『ジーニアス』の keep ~ing と keep on ~ing の違いに関しての語法欄の詳細ぶりを *COBUILD* と比較している。海外で日本の英和辞典の語法欄の説明を英訳してやると「これは文法辞典

ではないのか？」と言われるほどの徹底ぶりである。

(3) 文法コード

前述の *ISED* (1942) が動詞型と名詞の加算・不加算の區別を最初につけた学習英英辞典だった。この辞書が日本の英語教育の土壌で生まれたことが、後の英和辞典の文型表示を画期的に見やすくするのに大きく貢献した。これに飽き足らず、研究社の『新英和中』(二六七、初版) は Hornby らの複雑な記号による動詞型の整理を行い、透明度の高いコード (transparent code) の導入を行っていった。

小川 (二六八) によると、一九八〇年以前にすでに日本の英和辞典には語法欄、語源欄、類義語欄、英米文化欄、ジェスチャーの挿し絵、反意語・派生語の明示、「U」「C」の採用、動詞型・名詞型・形容詞型の表示、二語見出しや成句にもアクセントを表示するなどの工夫が施されており、「改訂新版や新刊の辞書はこれらの項目の扱い方の改善や更なる新工夫を盛り込むことが勝負所」(同二六九頁) となった。

この後、八〇年代後半から高校・一般向けの学習英和辞典は「戦国時代」に入る。それまで比較的研究社の独走態勢だった市場が『ジーニアス』(二六八) の登場で混沌としてくる。

『ユニオン』その後継の『ライトハウス』という「わかりやすさ」志向に対して、『ジーニアス』は語法解説などの「詳しさ」という別の物差しで定評を得るようになる。

三 「使いやすさ」の再認識の必要性

しかし、このような状況の中で、徐々に日本の英和辞典編纂は曲がり角を体験させられている。「使いやすさ」という概念が徐々に不透明になってきているのである。その現状を整理するといくつかの現象が見られる。

(1) 辞典情報の飽和化

英和辞典の市場は新機軸を提案する度に、他社がそれを取り込むという図式で発達してきたが、九〇年代以降、徐々にそれが通用しなくなってきた。一つは紙の辞書には絶対的なスペースの制約があるため、他社のアイデアを自分達の中に取り込んでそれに二三の目新しいものを付け加えて出すという従来の戦術が奏功しなくなってきたのである。斬新さを打ち出そうとコラム類を増やしていけば、当然別の部分をカットしなければならぬ。情報の取捨選択をして、思いきって特徴が出るようにしないと、全社横並びの辞書になって特徴

が出てこなくなってしまうのである。

(2) 取捨選択の判断基準が不明確

(1)のような不要な情報をカットするというニーズがある反面、そのための判断材料がまだ少ないというジレンマがある。八〇年代頃から、特に英国の学習辞典の出版が活性化する中で、ヨーロッパでは早くから「ユーザー研究」の成果を取り込んでいく、という姿勢が見られた。彼らの共通認識は、辞書の情報は改訂ごとに豊富になっていくが、実際にその情報のどれだけを学習者が使っているのかに関する客観的なデータに基づいた辞書作りが必要、ということであった (cf. Cowie 1987)。

例えば、辞書指導を受けたことのない一般の英語学習者は英文を読んでいて単語の意味を英和辞典で引く際に、ほとんど見出しの先頭しか見ない。例文が1番目の語義の後にたくさんあればあるほど、2番目の語義まで到達する確率は低くなる。また語義特定の際の主要な手がかりとして用いるのは文脈中の意味情報だけで、文法情報(例えば引く単語が加算名詞であるとか、-ing形をとる動詞であるとか)などはほとんど利用しない。かろうじて、これらの情報は語義が適切であるかどうかの補助的な判断材料として用いられる。こ

のように、辞書を作る側が役に立つと思われる情報も、タスクの種類によっては障害になることがありうるのだ。

英和辞典の編纂者たちが苦心してきたさまざまな工夫が一体どれだけ実際に活用されているのかに關しても、あまり樂觀視は出来ない。例えば、Tono (1998) では、ユーザーがわかっていると思っていることと実際の行動とは異なることを辞書の中で用いられる記号で実験している。

記号

アンケートで「知っている」 実際にそれを
と答えた人の割合 使えた人の割合

| | | |
|-----|-----|-----|
| [U] | 56% | 45% |
| [C] | 56% | 45% |
| [自] | 85% | 53% |

これは英語学習者が文法用語を知っていると答えても、実際には使えないのと同じギャップが辞書の約束事の理解にもあることを示しており、「U/C」の表示の意味を理解している大学生が約半数しかいないという結果が示すように、我々が当たり前と思うような基礎的な辞書の記号もかなりのユーザーは理解できていないことが多いのである。

南出 (一九九六) が指摘するように、日本ではユーザーにとって有用と思われる情報を注記の形で、できるだけたくさん辞

書に盛り込むことが「ユーザーにとって親切」と考える傾向がある (三三頁)。しかし、何が不要か、と言われると途端に返事に窮してしまうのである。

(3) 辞書編纂のパラタイム・ソフト

日本の英和辞典の編纂技術は英国の学習英英辞典に大きな影響を及ぼしてきたことは二節で述べたが、この一〇年程で英国の学習英英辞典の基本的な編纂方法が大きく変わってしまい、辞書編纂の形勢は攻守入れ替わったという感がある。その原因となったのが、コンピュータを駆使した大規模コーパスを用いた辞書編纂である。

詳しくは赤野氏の本特集記事に譲るが、特にコーパスを用いた辞書情報として重要なものは、今まで系統的に解説が難しかった語彙的コロケーション (collocation) と文法的コロケーション (colligation) に関する情報が大量に得られるようになったことであろう。LDOCE 2まではコーパス利用が十分でなかったために、例文はほとんどが完全文主義で、日本の学習英和もそれに倣って出来るだけ完全文で例文を出すようにしていた。しかし、最近は重要な頻度の高いコロケーションを限られた紙面で有効に出すために LDOCE 3 などでは、コロケーションに語義番号をつけてクローズアップ

し、句用例を大幅に増加させている。どういうパターンが可能か、という情報のみならず、そのパターンがどのくらい頻繁に用いられるか、という新しい尺度をコーパスから得ることが出来るようになって、頻度は単に見出し語レベルから、コロケーションレベル、語義・用法レベルにまで精密化できるようになってきた。それに応じて「使いやすさ」は新しい定義を必要としているのである。

日本の辞書編纂はこのパラダイム・シフトに十分ついていていない。まだ、表現するためや理解するためにどの語彙のどういうパターンがより頻繁に現れるか、という情報を盛り込むことにはほとんどノウハウがない状態だ。であるから、最近の英和辞典は以前にもまして *COBUILD*、*LDOCE*、*OALD*、*CIDE* などのコーパスを駆使した英英辞典の孫引きを余儀なくされているのだ。Della Summers (Longmanの辞典編集部編集長) に個人的にあった時も、「日本の英和辞典は素晴らしいが、我々の真似が多い」と逆に言われた時には、「一時はそちらが真似していたでしょう？」と喉まで出かかったことがある。しかし、もはや我々はあまりいい戦況ではない。

(4) 「使いやすさ」は本当に必要なのか？

最後に日本の英和辞典の「使いやすさ」を真面目に考えれば考えるほど、ユーザー本位ということが虚しく響くような社会的な背景がある。例えば、日本の英和辞典はほとんどが高校レベルでは学校採択になる。辞書の選択は学習者よりも教師の好みが左右するのである。そこで、辞書を作る側も、実際に使うユーザーよりも採用する教師のニーズや好みに敏感になる。そこに本当のユーザーレベルの提示方法などを考える際に、どうしてもギャップが出てくるのである。

また辞書は商品であるので、「使いやすさ」以外の要素で売れることもある。音声CDなどおまけが充実していたり、パッケージを変えればそこそこ売れる、ということだってあるのである。真正面から「使いやすさ」だけを考えると、辞書はあまりに現在の形態を離れてしまっただけで売れなくなるかもしれない、というジレンマを抱えているのだ。これらは辞書の社会学として一考に値する問題だ。辞書の社会的位置付けや、言語教育観・指導法などとの関連はあまり十分に研究されていない領域である。

四 新たな闘い

さて、この論考を締めくくるにあたり、英和辞典での「使

いやささ」に関して、まだあまり突っ込んだ議論がなされていないいくつかの観点に触れ、「新たな闘い」への期待を込めておこう。

(1) 語彙習得と辞書

外国語学習において、語彙はずっと周辺的な位置付けだった。その重要性が近年、言語学や言語習得の分野でクローズアップされてきたが、外国語学習における辞書使用の効果や役割について、我々は十分な検討をしていない。海外では、近年読解作業における意識的な辞書使用が語彙定着度を高めるといふ結果もあり (Knight 1994; Nist and Olejnik 1995; Lupescu and Day 1995) 外国語においては偶発的な語彙学習だけでは語彙習得は難しいということが定説化している。コミュニケーション重視でも、表現する語彙は必要だ。相手を理解するにはその何倍も多くの認識語彙が必要である。辞書を活用して、自学自習で新しい語彙を取り込んでいけるように学習者は訓練される必要がある。今後は、ますます辞書、単語帳、注釈などの語彙情報が語彙習得における役割を明確にしていくような研究が必要だ。

(2) 受信・発信用情報の峻別と提示方法の改善

外国語学習における辞書の役割を論じる際に、学習英和辞典の提供している情報がどのような言語活動にどの程度活用されるのかという「言語タスクと辞書情報との明確な関連付け」に関する研究がもっと必要だ。Encoding と decoding のそれぞれに必要な情報が峻別されてくると、それに応じた新しいインターフェースを模索することが出来る。本稿では論じなかったが、電子辞書の分野ではこの問題は特に重要な課題になってくるだろう。紙の辞書ではイメージが固定されていて、冒険がしにくい。電子辞書ではいろいろなインターフェースの工夫が試みられるべきだ。

(3) 辞書編集に新しい器を

欧米の辞書編集はものすごい勢いで電子化している。これからはユーザーのニーズを反映させるのにも、電子データの場合には柔軟に対応が可能になる。日本の辞書出版社も数年後には大型コーパスを駆使した辞書作りが環境的には可能になる。その際に必要になるのは日本人の英語学習に必要なデータ (学習者コーパス、生活用語コーパス、日英語比較コーパス、学習語彙リストなど) だ。これらを整備して、そのノウハウを蓄積し柔軟な辞書編集環境を作った出版社が二一世紀をリードするようになるだろう。

【注】

(1) この分野を関心して書かれた論文がある。また海外の資料としては Atkins (1998) が包括的な文献である。是非参照されたい。

(2) Palmer が訳出した *A Grammar of English Words* の日本語訳ローマ字の語彙を引くこと。Hornby の *Advanced Learner's Dictionary* (1978) / Cowie (1998) を参照。

(3) LEXICON (Iwasaki Linguistic Circle 発行) と題した (Historical Development of English-Japanese Dictionaries in Japan.) の辞書学に関する論文を掲載している。また、辞書学の発展を促すこと。

(4) 辞書の利用と辞書の編集のありかた Tono (forthcoming) を参照。

【参考文献】

Atkins, B. T. S. (ed.) (1998) *Using Dictionaries: Studies of Dictionary Use by Language Learners and Translators*. LEXICOGRAPHICS Series Maior 88. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Cowie, A. P. (ed.) (1987) *The Dictionary and the Language Learner*. LEXICOGRAPHICA Series Maior 17. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Cowie, A. P. (1998) "A. S. Hornby: a Centenary Tribute." In T. Fontenelle, et al. (eds.) *EURALEX'98 Proceedings*, pp. 3-16. Liege: University of Liege.

Knight, S. (1994) "Dictionary use while reading: the effects on comprehension and vocabulary acquisition for students of different verbal abilities." *Modern Language Journal* 78 (3), pp. 285-299.

Lupescu, S. and R. R. Day (1995) "Reading, dictionaries, and

vocabulary learning." In B. Harley (ed.) *Lexical Issues in Language Learning*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 229-251.

鹿田 義典 (1994) 「辞書利用と辞書学」 (英語学) 『英語学』 『英語学』 『英語学』 『英語学』

Nist, S. L. and S. Olejnik (1995) "The role of context and dictionary definitions on varying levels of word knowledge." *Reading Research Quarterly* 30 (2), pp. 172-193.

小川 繁 (1994) 「辞書・英辞書学」 (前編) 『英辞書学』 『英辞書学』 『英辞書学』 『英辞書学』

Strevens, P. (ed.) (1978) *In Honour of A. S. Hornby*. Oxford: Oxford University Press.

Tono, Y. (1998) "Interacting with the users: research findings in EFL dictionary user studies." In McArthur, T. and I. Kernerman (eds.) *Lexicography in Asia*. Jerusalem: Password Publishers, pp. 97-118.

Tono, Y. (forthcoming) *Research on Dictionary Use in L2 Context*. LEXICOGRAPHICA Series Maior. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Yamada, S. and Y. Komuro (1998) "English lexicography in Japan: its history, innovations, and impact." In McArthur, T. and I. Kernerman (eds.) *Lexicography in Asia*. Jerusalem: Password Publishers, pp. 149-166.

(この辞書は、辞書学)